

「男、突っ走る！」

第35回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (19)

名古屋芸術専門学校1年生

木内 真保 (46)

雅也の母

眞榮田 浩平 (19)

名古屋芸術専門学校1年生
名古屋芸術専門学校1年生

宮田 春奈 (19)

中央高校元生徒

鬼頭 美彩 (19)

中央高校元生徒

五十川 孝之 (19)

中央高校元生徒

1 居酒屋・全景（夜）

2 同・一室

雅也と美彩が入ってくる――既にテーブル席に座っている孝之と春奈。

雅也「おお、久しぶり」

孝之「お久しぶりです」

春奈「五分遅刻だよ」

美彩「ごめん。パンテーンに乗せてもらったんだけど、車が混んでてさ」

雅也「まだ免許取って半年も経ってないでしょ。初心者マークつけての安全運転だったから、意外と時間かかっちゃって。申し訳ない」

春奈「とりあえず、ドリンク決めよう」

美彩「そうね。まあ、といっても、私たちはまだ未成年だから、お茶にしところかな」

× × ×

一同「かんぱーい」

と、お茶のグラスで乾杯をし、テーブル

ルの上の一品料理を食べ始める。

雅也「五十川君は、いつ大阪に帰るの？」

孝之「来週には帰ろうかなと。でも、九月末

まで大学は休みだけど」

美彩「そんなに休みがあつて羨ましいわ」

春奈「私たちはそれぞれ看護学校と歯科衛生士の学校でしょ。現場研修はまだないけど、とにかく勉強することが多くて」

孝之「木内さんも専門でしょ？ 休みとかはあるの？」

雅也「一応八月いっぱいまで休みで、九月に二週間授業があつて、残りの二週間が秋休みって形で授業はないんだけど、何だかんだ原稿書いたり、自主制作したり、いろいろすることはあるから、ボーっと休むことはないと思う」

春奈「今でも脚本書いてるの？」

雅也「まあね。でもね、脚本を授業でやるのは二年生からなの」

美彩「じゃあ、一年生は何やるの？」

雅也「物語の作り方とか、基本的なことをやるの。あと小説書いたり、キャッチコピーとか記事を書く授業もある」

孝之「いろんな授業があるんですね。でも、元々木内さんは文章好きだから、結構楽しいんじゃないですか？」

雅也「まあね。でもね、意外とキャッチコピーって難しいんだよ」

美彩「何で？」

雅也「短い一言で、伝えなきゃいけないですよ」

美彩「ああ、確かに」

雅也「脚本で、ひたすら長いセリフ書いてる俺にとって、文章を短くしろっていうのは、なかなか酷な話でさ」

春奈「でも、良い勉強にはなるでしょ？」

雅也「それは言ってるね。それこそ作品のタイトル作るときにも参考になるかもしれない。文章に特化した授業がほとんどだから、俺も楽しんでる。体育の授業がないっていい。

うのも、俺にとってはめちやくちや嬉しいんだから」

春奈「そうだった。パンテーンは体育の授業苦手だったもんね」

雅也「最初はね、知り合いが一人もいない状況の中で学校生活送れるか不安だったし、高校に戻りたいっていうホームシックになることもあったの。けどおかげさまで、今はいろんな専攻に友達ができて、何とか楽しくやってる」

美彩「私もそうだった。今の看護学校、一応同じ高校から進学してる人いるけど、話したことない人だからさ」

春奈「私も、今通ってる歯科衛生士の専門学校には、高校の同級生一人もいない」

雅也「五十川君もそうじゃないの？ 当然大阪の大学には知り合いなんていないし、いきなり違う土地で一人暮らしっていうのも、結構大変だったんじゃない？」

孝之「いやいや、一人暮らしで伸び伸びとや

ってますから。大変なんて思ったことありませんよ」

雅也「五十川君のような鋼のメンタル、俺も持たなきゃな」

孝之「大したことありませんよ。自分で選んだ学校生活ですから、どれだけ楽しめるかですよ」

雅也「だね」

孝之「そりゃ全部が楽とは限りませんよ。いろいろ大変なことだって、学校生活を送るうえで何かと出てきます。でもそれだって、いずれは楽しい思い出になると思いますよ」

春奈「五十川の言う通りかもしれない。今思い返せば、私たちだって自分で検定受けるって言ったのに、結構検定勉強大変で、よくパンテーンに教えてもらってたもんね」

美彩「そんなこともあったね。テキスト見ても全然理解できなくて、ひたすらコンピュータ室にこもって検定勉強したね」

雅也「俺もあの時、ITパスポートの受験勉強

強も同時にやってたでしょ。いろんな知識が頭に入っては抜けての繰り返しでさ、俺は今何のためにこんな勉強してるんだろうって分からなくなることがあった。でも今になって、その検定勉強の時間も楽しい時間だったんだなって思うもん」

春奈「二年生まではほぼ毎日、部活で顔合わせで、一緒に勉強してたんだよね。三年生になってからは、私たちも補習授業とかでほとんど部活に行かなくなったけど、学校では顔合わせすることもあった。でも、卒業してもうすぐ半年が経って、その間私たちが四人が揃うことがなかったんだもんね」

美彩「それが環境の変化ってやつよ。みんなそれぞれの道を進んで行って、今があるんだから」

孝之「でも、宮田さんの声かけで、こうして四人集まれたんですもんね」

雅也「春奈、ありがとう」

春奈「不定期でも良いから、こうして集まる

うね」

大きく頷く一同。

3 名古屋芸術専門学校・全景

4 同・5階・廊下

雅也が椅子に座り、黙々と弁当を食べ
ている――女子トイレから、瑞枝が出
てくると、

瑞枝「あれ、うちーお疲れ」

雅也「おつかれ。自習？」

瑞枝「うん。うちーも？」

雅也「まあね。ちよつとコンクールに出すた
めの作品を書こうと思って。プロット書き
終わったから、お昼食べたら今度は本文に
取り掛かろと思って」

瑞枝「すごいね。相変わらず、うちーの創
作意欲の高さには関心するよ」

雅也「不思議とね、あれも書きたい、これも
書きたいっていうアイデアが出てくるの。

まあ、そのストーリーやキャラクターが面白い面白くないかはまた別だけどね」

瑞枝「でも、それも才能でしょ。普通に生活してて、こんなストーリー書こう、なんて思いつかないもん」

雅也「やっぱりここで授業受けてると、自然と送り手というか作り手の視点でいろいろ考えちゃうよね。電車乗ってるときもさ、中吊り広告見ると、内容よりも、この写真はこうやって切り抜いてるんだとか、あのキヤッチコピー良いなあとか、フォントは明朝なのかゴシックなのかって見ちゃう」

瑞枝「分かる。私も映像の授業受けてるとき、カット割りとか、アングルとか、あとCGだと光加減、これライティングっていうんだけど、そういういろんな観点で見ちゃうんだよね」

雅也「俺たち、一種の職業病だね」

瑞枝「そうだよね。私たちに限らず、夏休みもこうして自習しに来てる人とか、よく学

校で顔を見る人は、ほとんどがそうじゃないかな」

雅也「中には授業だけ受けてさっさと帰る子もいるしね。うちの専攻だって、夏休みに入ってからのこの約一ヶ月、一回も顔見えない子がちよくちよくいるもん」

瑞枝「鈴木先生が、あんな素晴らしいこと言ったのに、響いてないんだね」

雅也「高い学費を払ってるなら学校の設備を使いまくれ、でしょ。あれは響いたね」

瑞枝「うちーも？」

雅也「当たり前でしょ」

瑞枝「確かに、夏休みに入ってから私何回か学校来てるけど、いつもうちーいるわ」

雅也「定期券のこともあるんだよ。定期だから一ヶ月の間に何回乗っても良いわけですよ。それだったら、できるだけ時間のある時は学校に来て原稿書こうと思って。専用のソフト使ってるわけじゃないから家でも別に書けなくはないんだけど、やっぱり学

校のほうが集中できるから」

瑞枝「共感しかないわ。私も、家でやろうと思えばできる課題もあるんだけどさ、学校のほうがエンジンかかるの」

雅也「じゃあ、そのエンジンが止まらないうちに、作業再開しようかな」

瑞枝「そうね」

雅也「あ、みずちゃん。(と弁当袋から飴を取り出すと) 飴ちゃんあげる」

瑞枝「ありがとう」

と、階段を下りていく。

5 同・5階・502教室

雅也が入ってくると、つけっぱなしになっているパソコンの席に座る。

雅也「さて、書きますか」

と、雅也のスマホにLINEの通知が来る——スマホを開く雅也。浩平からのLINEである。

浩平の声「うっちー、今どこ？」

返信をする雅也。

雅也の声「5階のいつもの部屋」

と、浩平から返信がくる。

浩平の声「3階のデッサンルーム来て」

雅也「デッサンルーム？」

6 同・3階・廊下くデッサンルーム

雅也がエレベーターから下りてくる――ドアを開けて、デッサンルームに入る。

浩平が、イーゼルを立てた状態で、画用紙に自身の手を見ながらデッサンをしている。

雅也「眞榮田君」

浩平「（嬉しそうに）うっちー！」

雅也「何やってるの？」

浩平「夏休みの課題。デッサンの授業でさ、

自分の手を百枚書くの」

雅也「百枚！？」

浩平「毎年、一年生のデッサンの授業は、百

枚手を書くデッサンの宿題があるんだって」

雅也「百枚ってことは、いろんな手をするわけだ。例えば、グー、チョキ、パー。あと、一本指とか二本指とか」

浩平「そうそう」

雅也「大変だねえ。良かった、デッサンの授業なくて」

浩平「まあ、うちーは文章だもんな」

雅也「まさか、俺にデッサン手伝えていうわけじゃないよね？」

浩平「そんなわけないじゃん。たださ、ご覧の通り、デッサンルームに誰もいないわけだよ。俺としては寂しいわけさ。だから、うちーもここで自習したらどうかと思ってる」

雅也「ここで？」

浩平「机は、あそこにある畳であるやつを使えば良いから」

雅也「自習って言われてもなあ。何かあるかな。(と考えると)あ、ちよっと待ってて。」

すぐそのこの文房具屋寄ってくる。机だけ出しといて」

浩平「分かった」

飛び出していく雅也。

7 文房具屋

雅也が原稿用紙を購入している。

8 名古屋芸術専門学校・3階・デッサン
ルーム

浩平が手のデッサンをしている——ド

アが開き、雅也が戻ってくる。

雅也「ただいま」

浩平「おかえり」

雅也「これ買ってきた。（と鞆から原稿用紙を取り出すと）今日は、久しぶりに手書きで原稿書く。それなら、ここでも作業できるから」

浩平「良いね。やっちゃって」

雅也「うん」

× × ×

原稿用紙で原稿を書いている雅也と、
画用紙にデッサンをしている浩平――
それぞれ黙々と作業をしている。

× × ×

夕方――。

それぞれの作業をしている雅也と浩平。

浩平「よし、今日はこれぐらいにしとくか」

雅也「あ、もう五時じゃん。夏休みだから、

もう学校閉まっちゃうよ」

浩平「夏休みも九時まで使わせてくれたら良

いのに」

雅也「しようがないよ。あくまで今は夏休み

期間なんだもん」

浩平「進んだ？ 原稿の方は」

雅也「うん。プロットはある程度作ってたか
ら、何とか進んだよ」

浩平「（原稿用紙を見て）これ、全部で何枚
あるの？」

雅也「二百字詰め原稿用紙が百枚。これで、

約一時間ドラマ一本分だよ」

浩平「原稿用紙に換算すると、こんなにもあるんだ」

雅也「連ドラ書いてる脚本家の人って、この束を十何話も書くんでしょ。大河ドラマなんて一年だから約五十話。すごいよね」

浩平「うちーも、そういう脚本家になりたいんでしょ？」

雅也「うん。だからね、この百枚でヒーヒー言ってもらえないと思って」

浩平「俺もだ。デッサン百枚の宿題なんかに怖気ついてたら、何もできないからね」

雅也「ありがとう、誘ってくれて。おかげで、大分捗った」

浩平「俺も結構進んだよ。こちらこそありがとう」

雅也「眞榮田君のやる気があったからだよ」

浩平「なあ、うちー。良いよ、君づけしなくって」

雅也「え？」

浩平「眞榮田って呼び捨てで良いんだよ。映像科の他のメンバー、みんなそうやって呼んでるんだから」

雅也「良いの？ 呼び捨てにしちゃって」

浩平「マイスクールキャンプから、俺、うちーともっと仲良くなれてる気がするんだよ」

雅也「それは俺もすごく思う」

浩平「じゃあ、別に良いじゃないか」

雅也「そうだね。オツケー。眞榮田、ありがとう」

浩平「こちらこそ」

微笑み合い、ハイタッチをする雅也と

浩平。

9 道を走る乗用車（夜）

10 その車の中

真保が運転し、雅也が助手席に座っている。

真保「夏休みだって言うのに、学校ばっかり
行ってるけど、そんなにやることあるの？」

雅也「コンクールに出す原稿とか、いろいろ
やることがあるの」

真保「家でやれば良いじゃない」

雅也「家だと集中できないことだってあるで
しょ。今は学校っていう集中できる環境が
あるんだもん、そこでみんなと一緒に作業
すれば、自然と捗るの」

真保「最初の頃は、高校が良かったなんて言
ってたくせに、もうすっかり専門学校の生
活に染まっちゃってるんだ。この間なんて、
学校帰りにカラオケ行っただって話してくれ
たじゃない。高校の時までのあんたとは大
違いだわ」

雅也「高校は、やっぱり校則とかあったから
ね。でも専門学校は、学校帰りにどこかに
行ってはいけないうるルールもないし。
それに、高校の時なんて家から学校までの
通学路にあるものっていったらスーパーと

コンビニと図書館ぐらいだよ。遊ぶところが、そもそもないんだから」

真保「まあ、それはそうね」

雅也「栄なんてカラオケもあるし、ゲーセンもあるし、居酒屋もあるし、遊んだりご飯食べるところなんていくらでもあるんだから」

真保「都会に染まりすぎないようにしなさいよ」

雅也「分かってるよ。でもさ、これまでそういう生活送ってこなかったでしょ。だから学校帰りに、友達とご飯に行ったり遊んだりするのも悪くないなって最近思い始めた」

真保「前まではインドアで、休みの日なんて家から出ない子だったのにねえ」

雅也「そうなんだよね。不思議と専門入り始めてから、外に出ることに何も感じなくなつた。むしろ楽しいから」

真保「学校の友達と仲良くやってるんだっから、それで良いけどね」

雅也「みんな面白くて、個性的な子ばかりなの。その中に自分もいるから、みんなワイワイやってる」

と、雅也の携帯電話に着信が来る――
浩平からである。

雅也「（電話に出ると）もしもし眞榮田。今日はありがとね」

浩平の声「いえいえ、こちらこそ。うちー、もう家？」

雅也「さつき最寄りの駅に着いたところ。今、家に帰ってる最中。何かあったの？ 眞榮田が電話してくるなんて初めてのことだから」

浩平の声「実は思いついちゃったんだけど、同級生の何人かに声かけて、みんなでバーベキューやらない？」

雅也「バーベキュー？ 良いね、楽しそう」
浩平の声「うちー、乗ってくれる？」

雅也「もちろん。またいろいろ相談しようよ。
うん、じゃあね」

と、電話を切る。

真保 「あんたが、バーベキューねえ」

雅也 「眞榮田からのせつかくのお誘いだもん。

絶対楽しくなるよ」

真保 「本当にいろんな意味で変わったわね、

あんたは」

雅也 「みんなだバーベキューかあ」

嬉しそうな顔の雅也。

つづく